

子どもの歯科治療

立花美和

(歯科医師)

歯科治療を頑張る子ども

私は24歳で新潟大学歯学部を卒業、その後、故郷である石川県の病院の口腔外科にて研修を終え、25歳より地元の歯科医院に勤務しています。今年で歯科医師として9年目です。結婚、出産を経て、現在1歳児の母となりました。子どもを保育園に預けて、週3、4日のパート勤務をしています。一般の歯科治療を行いながら、小児患者さんの口腔内管理、治療にも力を入れています。

子どもの治療は優しい先生の先生がいいと希望されることが多く、おのずと女医は小

児患者を担当する機会が増えます。2歳頃までの小児患者は、フッ素塗布や虫歯のチェックがほとんどですが、お兄ちゃん、お姉ちゃんになるに従って、虫歯治療や歯の根の治療、乳歯の抜歯など、積極的治療が必要な子も増えてきます。

椅子に座るのを拒否する子。「注射は絶対に嫌!」と泣き叫ぶ子。指示された通り治療チェアに横たわり口を開けるけれど、本当は怖くて、我慢できずに静かに涙を流す子。子どもの反応は千差万別です。それはそうですね。大人でさえ歯の治療は怖いもの。子どもはもっと怖いに決まっています。

そんな子どもたちの治療時の恐怖を少しでも和らげるため、私たち歯科医はさまざまな工夫をしています。

例えば、治療中にはなるべく「痛い?」「削るよ!」など、嫌な想像を膨らませるような、消極的な言葉を使わないように心がけています。「先生、頑張つて○○ちゃんのお口の中に入るムシさんをやつつけるから、大きいお口を開けていてね。そうね、カバさんみたいなお口がいいな」などと声をかけます。

麻酔の注射が必要なときには、「これから歯を眠らせる魔法をかけるけど、魔法が目に入ったらいけないから、目をつむっていてね」と患児に説明し、目を閉じさせます。怖い子は、ママに手を握ってもらいます。そのような状態で、注射器を子ども視界に入れないまま、表面麻酔をたっぷりと効かせてこっそり注射してしまいます。そうすると、意外と注射された感覚がなく、「いつの間にか歯に

魔法にかかった!」と思う子が多いのです。

好きなアニメやテレビ番組があるか患児に尋ね、そのテーマソングを私が歌いながら治療することもあります。「妖怪ウォッチ」や「アナ雪」がやったときには、一日に何度同じ歌を歌ったことでしょうか……。

無事に治療を終えた子には、「すごいね。こんな治療ができる子なんてなかなかいないんだよ、偉い!」と、少し大げさに褒めてあげます。治療が最後まで上手にできなかった子にも、「今日は最後までムシさんをやつつけることはできなかったけど、頑張つてお口開けてくれて偉かったね、また今度頑張ろうね」と、結果ではなく、努力した過程を褒めてあげるようにしています。

子どもの歯の治療をしていて気づくこと

そうやって、子どもとコミュニケーションをとりながら治療を進めていくのですが、子



どもの順応性は大人
のそれよりも素
晴らしいです。は
じめは泣いて嫌が
っていた子や治療
チエアにすら座れ
なかつた子でも、

初回は椅子に座るだけ、次の回では、座った椅子を倒して口の中を見せてくれるところまで。3回目で、ちよびつと虫歯を治療用スプレーで取らせてくれたりして、最終的に虫歯治療を最後までできるようになることが多いです。歯医者さんは怖くない、自分は上手にできるから大丈夫!と、子どもが自信をつけたらこっちのものです。「この子、ちつとも歯医者さんが怖くないみたいで、早く行きたいって言って楽しみにしているんですよ」なんて保護者の方から言われようものなら、心の中で小さくガッツポーズをとっている私です。

虫歯治療において、きょうだいの存在というのも大きいように感じます。上の子であれば、治療の応援にお母さんだけでなく下の子も一緒に来ていると、「カッコいいところを見せなければ!」と思い、いつもより頑張ってくれます。下の子は、お兄ちゃんお姉ちゃんが治療しているのを見て、「わたしもやってみたい!」と思うのか、案外すんなり口の中を見せてくれたりします。面白いですね。

歯科医として、母親として

「虫歯になりやすくなるので、甘いものは子どもにあまり与えないようにしてください。」
「ジュースなどの飲み物類は特にNGです。」
昔から、患児のお母さんたちにはそう指導してきました。「歯磨きは本当に大切なので、本人が嫌がっても押さえつけてでもやってください」とも。指導されたお母さんたちは「そうですよねえ……」と少し歯切れの悪い返事。

子をもった今ならわかります。これらのこと、簡単なようで難しいんです。仕事や家事で手が離せないときや、子どもが風邪を引いたときなど、どうしても子が欲しがらるお菓子やジュースをあげてしまいそうになります。歯ブラシも、泣き叫び暴れる子どもの顔を固定して、奥までしっかりとブラッシングするのは大変！ これまでずつと指導する立場にありましたが、実践するほうの気持ちや大変さは、母になって初めて知ることができました。

小児の治療を通して日々学ぶことは多いですが、自分が子育てを経験してみても、以前よりも患者さんの気持ちに寄り添うことができるようになったように思います。

また、昔から通院してくれているなじみの患者さんからは、「先生の赤ちゃん、元気？ 今いくつなんけ？」なんて声をかけてもらい、そこから会話が盛り上がることも。子どもの写真を見せると目を細めて「かわいいねえ」

と喜んでもらえてうれしくなります。

現在、子どもは1歳半。保育園に行き始めてからというもの、月に1度は風邪をもらい、子どもが風邪を引けばもれなく親も風邪を引き……。次の日が仕事であろうが容赦なく襲い来る夜泣きや看病と仕事の両立は決して簡単ではありませんが、家族や周囲の人々に支えられ、何とかこなせています。日々の生活をアシストしてくれる夫や実母、子どもを預かってくれる保育園の先生方、子育ての融通を利かせながら勤務させてくれる医院への感謝を忘れずに、これからも頑張っていきたいと思えます。

